

高齢者が 安心して暮らせる町を

東京都府中市 府中西部地区生活会議



「遅くなったかと思って急いで来ちゃったよ」「まだ時間前だから、大丈夫よオ」「いつも家にいるから、楽しみでねえ」破顔一笑のおばあちゃんの声に、準備作業の手を休めて応えるメンバー。「みんな楽しんでみながら、あっといいう間に時間が過ぎていて、それでいい運動にもなるのよ」と参加者。

東京都府中市内にある西原町（約千三百世帯、人口約四千人）の自治会館で毎週木曜日、午前十時から夕方四時まで「デイサービス」が開かれている。冒頭のやり取りはここでの「こまだ」。

このデイサービス、主催は西原町福祉ネットワークという住民主体の福祉団体。平成一三年、市の地域デイサービス事業がスタートしたのに伴い、「西原町でも」ということで、自治会、老人会、そして生活会議が協力して福祉ネットワークが結成された。運営の中心を担っているのが、西部地区生活会議（代表・来栖美美さん）だ。

といてしまえば、それまでだが、それにはこうした下地があった。住民のニーズを知るために全町民対象のアンケートを実施。結果、「町に永住したい」という人が大半を占め、また社会福祉についても関心が高く、ボランティア活動も参加したいと考える人が多いことがわかった。このことから、住みよい環境を守るためになにかはしたいが、そのきっかけがわからないという人がかなりいるのではないかと生活会議では分析した。また、この年はおりしも阪神大震災の起こった年。「いざ」というときに助け合える体制が必要だと痛感した（来栖さん）という二つが重なり、住民の地域活動参加の促進と緊急時の体制づくりを念頭に、福祉ネットワーク結成にこぎつけたのだった。地域には今なにかが必要か、住民はどんな思いを持っているのか。糸を紡ぐように地域の問題に相對してきた。それが生活会議。（生活会議とはあしたの日本を創る協



会が長年進めてきた住民活動のひとつ)

では、このデイサービスではどんなことがやられているのか。百聞は一見にしかず、写真をご覧いただければいいのだが。提携している在宅介護支援センターから指導員が来て、高齢者の健康管理として血圧測定や年二回の体力測定、体操、ゲームなどを行なうほか、月一回の昼食会などもやっている。

毎回三十人ほどのお年寄りが出てきて、みんなで和気藹々とひと時を過ごす。参加者の最高齢は九十四歳のおばあちゃん。なかなか外出することもままならなくなってはきたが、昼食会などは数少ない楽しみだという。

市内でもいくつか、高齢者対象の昼食会を始めたところがあったそうだが、のきなみ長続きしないのだという。生活会議の副代表・望月友子さんは、「お世話する方も七十歳を超えてるんだから、みんな一緒に仲良くやってるんですよ」と笑う。ひよっとすると、このあたりに長続きのヒントがあるのだろうか…

午後になると、自治会館の二階ではおじいちゃん、というには失礼！ 男性陣による「囲碁クラブ」が始まる。参加者の一人、平野和郎さん（七十九歳）は言う。「いずれ誰でも老齢期になるんだから、こんなふうになにか趣味を持っておいたほうがいいですよ」。

一方女性陣は一階で古切手の整理やクリス





マスプレゼント（町内の高齢者へのプレゼント）の布製ツリーづくりの準備に取り掛かっていた。年齢に応じた作業をこなしていく。鼻歌交じりに実に楽しそうに切手の整理をしているおばあちゃん。あるいは、ツリーづくりを見に来て、「私も作って孫をびっくりさせようかしら」というおばあちゃん。始終笑い声が絶えない。「これ以上笑わせてシワを増やさせないでヨ」「あら、笑いは健康にいいのよ。笑わせ貸ちようだいッ」。

三年前からは「見守りネットワーク」というのも始めた。「平素の生活の中で何気なく見守りをしてください」「戸別訪問はしなくてもいいです」というもの。数日間洗濯が干しっぱなし、雨戸が締めたきり、あるいは夜でも開いたまま、新聞が溜まっていく、買い物など外出の様子が見られない、などちよっと気になることがあった場合には各班の担当者に連絡するというもの。福祉ネットワークで話し合い、問題の程度によって解決方法を探る。さりげないサポートが信条。

「支える人がいなければこうしたことはできないけど、ここには生活会議があるからボランティアの数がそろろう。私たちが三十年近く、生活会議を続けてきた底力がこの町にはある」とメンバーの一人は話してくれた。

■連絡先

〒一八三〇〇四六 府中市西原町二一七七一五
府中市西部地区生活会議代表 来栖明美